

稱讚

第二号

二〇〇三年三月一日発行

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

骨を砕きても謝すべし

(恩徳讃)

二月十六日(日)に初法話会を開催させていただきました。

当日は、雨・雪の中をお出でいただき、そして、多くのお祝い、ご懇志、お供物を賜りましたこと、厚くお礼申しあげます。

開設するにあたり、ご案内させていただき、ご返信もいただいていたのですが、正直申しまして、お出でいただけただろうか、また、礼拝施設の工事が間に合うかどうかと、不安でありました。

前日の夜中まで、工事をしていただき、お内陣も荘厳され、なんとかお勤めできる状態にいただきました。

朝、「雨も降っているしなあ」と思いながらお待ちしておりましたら、ご近所の

母娘さんお二人が来られました。ご近所にご案内してはおりましたが、大変失礼なことではありますが、お出でいただけるとは、予想だにしておりませんでした。急激に緊張が高まり、どう進めたらよいか戸惑いながら、お正信偈の意訳「しんじんのうた一」のお勤めをし、お話をさせていただきました。



お話の内容は、御同朋の社会をめざす私たち浄土真宗の門信徒は、「念仏の声を世界に子や孫に」をスローガンに掲げて、私が称えるお念仏が、私が称えることで効力があるのではなく、いつの間にか私の口から「南無阿彌陀仏」と称えさせてくださった先人の方々とのご縁に感謝させていただきたいものです。ことでありました。

その中で、一般にはお念仏に対する理解は、「祈り」とか「願い」と言った私から仏へのはたらき(自力)と受け取られていることをお話した際、お聞きいただいていた母娘さんお二人がきよとんとしたお顔をなさったので、「むずかしいかな」と失礼ながら思ったので、お尋ねしてみました。

そうしましたら、娘さんが、「そんなこと思いませんでした」「ただ子どもの頃から家族がお念仏していたので、祈りだとか、お願いごととは考えてもいませんでした」をお話しくださいました。そのことを聞いて、私自身はずかしくなっていました。

自身、「相手の方は何も知らないんだ」「おそらくお念仏を祈りとか願いとごっちゃにしている」と勝手に思い込み、教化者意識を出して、口説こうとしておりました。あせった私は、お念仏の説明はそこ

そこに「御同朋の社会をめざす」ために、共に生活する中で、悩みを共有し、お念仏申させていただきたくてお話を終え、お茶を飲みながら雑談をしました。雑談をしているころ、雨の中をわざわざ世田谷からお出でいただいたお一人から、お勤めも法話もせず、雑談をしただけで済んだのに、お祝いを賜り、その上手作りの「ぶり」と大根の煮付け」までいただきました。

昼の法話会には親戚も駆けつけてくださり、お同行を五反野駅にお迎えに行つて帰つてまいりましたら、教務所時代からお世話になった婦人会の方々もお出で、私が帰つてきたすぐ後に、築地の開法ホールのお同行の方々も駆けつけてくださり、賑々しくお勤めいたしました。お話は、お念仏を通して自身を「嘆く」という感動の心を持ち続けたいものではないかというものであります。

今回は夜の法話会はお休みさせていただきました、東組の若手僧侶の集まりである「東親会」の方々全員お出でくださり、池田行信先生(前東京教区相談員)をお招きして開所を祝つていただきました。

これからは、東組の一員として微力ながら尽くさせていただきます、東組連続研修会に参画して参ろうとあらためて決意させていたいただきました。

この一日を終え、振り返ってみると、何

かと準備不足でありました。

布教所までの道案内ももっと詳しくしなければならなかったと思います。特に当日は雨・雪になり、天候のことなどを考えていませんでした。

そして、姉・兄が居てくれたし、親戚の方が居てくださり、接待役に徹していただきました。姉のお友達には、お参りくださった方々がお帰りになる際、雨の中を表に出ていただきタクシーをひろつてくださいました。

私一人ではただ右往左往するだけだったと思います。

そして、何よりもお参りくださった方々に感謝せずにはおれません。

初回でこんなにお出でくださったこと、やる気満々にしてください、将来への不安を払拭させてくださいました。そして、今日まで多くの人に支えられ、これからも支えられているのだとあらためて感じたことであります。

この法話会のご案内に対するご返事の中に、「老齢で参ることができません」と言った内容のご返事を頂戴いたしました。

そのことを思うと、お寺は開法の間にはありますが、来たくても来れない方のところへは、こちらからお伺いする姿勢が大切だと思いました。

これからお念仏を通して、遇う方遇

う方とのご縁を一つひとつ大切に参りたいと思いますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

合掌

【ご案内】

① 足立布教所開設記念法要

日時 四月十八日(金) 午前十一時

会場 足立布教所(稱讚寺)

講演 中西智海先生(築地本願寺輪番)

講題 一今こそ、親鸞聖人の教えを

② 訪問法話

ご家庭での法話会をすすめております。お一人であっても、お一人であればこそ、どうぞお電話ください。また、法話会(毎月十六日・日曜日)ではなくても、ご都合の良い日にいつでも布教所をお訪ねください。その時は、お出でいただく前にお電話ください。

③ 「西本願寺展」関連文化講演会

日時 三月二十九日(土) 午後二時

会場 足立区生涯学習センター

講師 行徳真一郎氏(東京国立博物館)

演題 絵画化する「南無阿彌陀仏」

※布教所電話番号 〇三―五二四二―二〇二五

※布教所FAX番号 〇三―五二四二―二〇二六

感動の「嘆き」について

聞くところを慶び

獲るところを嘆ずるなり

『教行信証 総序』

前回まで親鸞聖人の報恩講についてお話ししました。覚如上人の著作である『報恩講式』の中身に触れましたが、その中に聖人のお徳に対して報いるのに、「本願相應の徳を嘆ず」とありました。聖人のお徳に報謝するのに、何故に嘆じなければならぬのでしょうか。また、親鸞聖人は『教行信証』（総序）の中で、「聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなり」ともおっしゃっております。

そして、唯円さんがお書きになった『歎異抄』にしても、その「歎」は「嘆」と同じ意味ですが、ここでも、「嘆く」という言葉がキーポイントになっております。

私は学生時代、『歎異抄』は、聖人のお念仏の教えを曲げて伝えている人、また誤解している人たち、つまり「異安心」の方々を嘆き、後生の人々に常日頃、親

鸞聖人がおっしゃっておられたお念仏の教えを正しく伝えようとされた唯円さんの思いが書き記されているものと、勝手に解釈しておりました。

しかし、それはただ単にそうではなかったのです。

『歎異抄』後序に、

「さればかたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどもしらずして迷へるを、おもひしらせんがために候ひけり。まことにわれもひとそらごとをのみ申しあひ候ふなかに、ひとついたまじきことの候ふなり。そのゆゑは、念仏申すについて、信心の趣をもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとの口をふさぎ、相論をたたんがために、まったく仰せにてなきことも仰せとのみ申すこと、あさましく歎き存じ候ふなり。このむねをよくよくおもひとき、ころえらるべきことに候ふ。かなしきかなや、さいはひに念仏しながら、直に報土に生れずして、辺地に宿をとらんこと。一室の行者のなかに、信心異なることなからんために、なくなく筆を染めてこれをするす。なづけて『歎異抄』といふべし。」

と、唯円さんは述べておられるのです。そこには、異論を唱える人の行為を批判して嘆いているのではなく、聖人の教え

により阿弥陀如来のご本願に遇えているにも拘わらず、我が信心が正しいとして、善惡を自分で判断し、人を責めていた自分があることに気づかされるのです。

そこに、いよいよ己の愚かさを知らされ、いよいよ阿弥陀如来の本願の確かさを深めていかれたところの「嘆き」を後生の御同朋御同行に伝えたかったのでは無いのでしょうか。

そして、この嘆きは人に対して嘆くのではなく、自分自身の本當の姿を照らし出され、そういう自分が既に阿弥陀如来の手元に抱きかかえられていたことへの感動の嘆きなのであります。

私は、「嘆く」となるとどういうときに嘆いているかと考えると、「思い通りにならなかったとき」「自分の思いを相手が理解してくれないとき」というように、自分を棚に上げて、人を、この社会を嘆いていきます。

また、有縁の人、生きとし生くるものとのこの世での別れは、誰もが辛く、悲しく、寂しいものであり、自分ではどうすることもできないがゆえに、私たちが嘆き悲しみます。そこには、この世での「死」はこのいのちの終わり」との思いでしか捉えられない私たちがあり、「自分を」嘆くのではなく、この世での存在が真実であると思っておりますから、亡くなる人は「かわいそう」としか思えな

いのであります。

また、感動の表現としても使われます。「感嘆」とか言いますが、例えば、大自然の驚異に遭遇したとき、己のちつぽけさを知らされることもあります。

そして、自身を嘆くとき。そこには自分で自分を責めるので、救いがありません。しかし、真実の大きいなるはたらきに出遇えたら、本当の己を知らされ、そういう己をこそ既に救って来ていたことに気づかされたとき、本当に自分を嘆き感動するのであります。

「嘆異」という言葉があります。これは、「異なることを嘆く」という意味ではなく、「すぐれていると心に感じ入る」という意味があります。

「すぐれている」ものに出遇えたとき、己の思量でははかりしれない、及びもしない大いなるはたらきに出遇うということとです。

その大いなるはたらきこそ、如来の本願力であり、その智慧のはたらきにより、己の本当の姿を知らされ、同時に如来の慈悲により、そういう私をこそ既に抱きかかえすぐつておられたと感動するのであります。

本願力にあひぬれば

功徳の宝海みちみちて
煩悩の濁水へだてなし

功徳の宝海みちみちて
煩悩の濁水へだてなし

と、親鸞聖人は詠われました。

煩惱に眼さえられた私たちは、煩惱を煩惱と知らず、自己中心にしか生きられない。そういう私たちが、既に如来は見そなわし、誰もが仏になる存在であることを教えてくださっています。煩惱を煩惱と気づかしてくださり、煩惱のまますぐつてくださると誓ってくださった、この阿弥陀如来の本願力に共に遇わさせていたいただきたいと思うのです。

唯円さんは、「そういうあなたはずくわれる・すぐわれない」と自分が判断していたことを知らされたことにより、そのことは傲慢なことであり、阿弥陀如来は既に誰をもすくい、はたらきかけてくださったのだ、何と愚かな私でありましたと、自分を嘆き、どうか後生の方も、この如来の本願力に遇つていただきたいと願われたのが、『歎異抄』を作成された真意だったのでないでしょうか。

浄土真宗では、ご聴聞が大切だと申します。

ご聴聞してご信心を獲られるのではないのです。

ご聴聞していることで、その大いなるはたらきがまさに阿弥陀如来のご本願でありましたと、確かに肯けるのではないのでしょうか。

そこに、「聞くところを慶び」、「ご信心をいただいたことにより、この私の愚

かさを照らし出されるからこそ、感動の「嘆き」に至るのではないのでしょうか。

私たちが、「自分を嘆く」と言うより、「他の嘆き」より「自分の嘆き」を主張したがりません。

仏法に出遇うとは、「他の嘆き」を聞き、共有するところ、ご聴聞の場、お念仏申す場によってひらかれるものなのではないのでしょうか。

私の口から出る「南無阿弥陀仏」のお念仏は、私が勝手にしているのではなく、私たちが先人が絶えることなく、受け継ぎ引き継いで、身を粉にしても骨を砕いても伝えてきてくださったからこそ、今こうして私の心に、私の口に「南無阿弥陀仏」のお念仏が起こされているのでありましょう。

そのことを思うと先人のご恩に対して報恩感謝の思いが自然に湧き起こるのではないのでしょうか。

報恩感謝のお念仏は、実は既に私にはたらきかけてくださっていた如来の呼び声なのです。

共にお念仏申し、仏法に遇わさせていただきます。

合掌